

キリスト道講演会

## 「見えるもの」と「見えないもの」(一)

2015年10月25日(東京 新宿)

奥田 昌道

外なる人と内なる人 私の悦ぶ子 放蕩息子の話 悦びの存在 「見えるもの」と「見えないもの」  
不安と重荷 私の過去の姿 ヒルティ『眠られぬ夜のために』 必要なのは忍耐 二つの型の人  
間 今見ざれども 見ぬ物を真実とする 地上と天国をつなぐ抛り所 イエスの中に隠されてい  
る見えない神 神の啓示によって初めて明らかに ニコデモとの対話 見えない永遠の霊的実  
在者 新人生歓迎会 老人ホームでこんな話を 旧き人間と新しき人 あなたに永遠の生命を与  
えよう 一人ひとりはその実験材料 この世に遣わされた派遣社員 別次元の本当のリアリティ  
祈り (参考) キリスト道講演会 講演レジュメ

### 外なる人と内なる人

今日の主題は、『見えるもの』と「見えないもの」というタイトルを掲げました。だいたい、神さまは見えない。そうでしょ。見えないものというのはいっぱいあるわけです。いっぱいある見えるものに囚われないで——それも素晴らしいものがたくさんあるんです、美しい人がたくさんいらっしゃいますし——けれども、もつと奥にある素晴らしいものをしてかりと見ていきましようというお話なんです。それから、聖書の中にも出てきます。

「<sup>うわべ</sup>上辺は美しい羊か何かのようだけれども、一皮はげば、それは恐ろしい狼だよ。そういうものに噛みつかれないようによく気をつけろ」

といったことも出てきたり、あるいは、

「善き樹は善き果<sup>み</sup>を結ぶ。悪しき樹は悪しき果を結ぶ」

「その樹が善いか悪いかは結ぶ果によって判断しなさい」

といったことも出てきたり、いろいろキリストの言葉に知恵がこもっているように思えます。それで今日は、どなたにもわかっていただけ、どなたにも関係が深いタイトルをここに掲げまして——皆さんにレジュメをプリントしてお配りしていますので——それに沿いながら皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

まず、演題が、『見えるもの』と「見えないもの」。副題が、「真に永続するものを求めて」です。プリントの「要旨」というところで、

《私達は日常生活において、「見えるもの」に心を奪われがちですが、「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」との聖書の言葉を大切に  
にして、どんな時にも「神さまのご配慮と導き」に委ねて歩みたいと願います。》

パウロはいろんな自分の苦難のことを述べまして、



「自分はもうズタズタだ、ガタガタだ。生きていいのか死んでいるのかわからない。でも、死んでいるようでありながら、視よ、生きています。苦しんでいるようでありながら、視よ、喜んでいます」

とか、そういう逆説的なことをいろいろ述べたあとで、次の言葉が出てきている。

「この故に我らは落胆せず、我らが外なる人は壊れるけれども、内なる人は日々新なり。それ我らが受くる暫くの軽き患難は極めて大なる永遠の重き光栄を得しむるなり。我らの顧みる所は見える者にあらず見えぬ者なればなり。見えるものは暫時にして、見えぬ者は永遠に至るなり。」(コリント後4・16～18

文語訳)

「だから、わたしたちは落胆しない。たとえわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」(コリ

ト二4・16～18 口語訳)

文語で「外なる人は壊れるけれども」、口語では「外なる人は滅びても」とありますが、これは人間のからだのことです。

私は妻を天に送った時(2012)にやはり思いましたよ。外なる人は壊れて行った。病でズタズタになって。そこから解放されて、キリストのもとに迎えられた。これは喜ばしいことですが、やはり私は悲しかった。そういう私にとってこの言葉がいつもとても励ましになりました。外なる人は破れた。破れざるを得ない、そういう人間の背負っている宿命みたいなものです。しかしながら、この破れ壊れていく肉体の中に、その奥にちゃんと壊れない永遠なるものの種がまかれ、そして育っている。ちょうど蝉が殻を破って羽ばたいていきますように、残ったのはもう亡骸だけです。でも、それで蝉が無くなったのではない。見事に空に羽ばたいて行った。それと同じように、我々人間というものも、どんなに頑張ったって、まだ16歳が最高みたいですね。でもそれで終わり。人は土から生まれて土に還る。土から生まれたものに息を吹き込んで、人間は生きるものになった。でも終わりが来ますと、また土に還る。土から出てまた土に返る。それでお願いであつたら、あまりにも人間とははかない存在なんですね。

「慰霊祭」や何かをやっていますけれども、本当に皆さん、霊が生きていますと信じてやってらっしゃるの? 「黙祷!」と言って、やっておられるけれども。我々にとっては本当にそれは真剣なんです。死ぬはずがない。外なる人は——人間は、老衰であろうが病気でであろうが、とにかくこの人間の身体というのはまだ120歳を越えた人がいないんです。120歳を越えないで土に還っていく。それでお願いだと。



「ああ、立派な人だった。素晴らしい人だった」と、追憶の中には残ります。記憶の中には残るけれども、その人自身が本当に実在していなければ、やはりはかないように私には思えます。

「外なる人は壊るれども、内なる人は日々あらたに新なり」

とあるでしょ。しかも、

「我らが受くる暫しばらくの軽かろき患難なやみは、極めて大なる永とこしえ遠の重き光栄を得しむるなり。」

人生は悩みが多い。いろいろな悩み、患難、苦難があります。しかしながら、それは永遠の重い栄光をあふれるばかりに私たちに得させるからである。肉体は滅びて土に還つても、その奥に立派な霊なるひとが育っている。霊なる生命が育っている。それが肉体を脱ぎ捨てた時には、ちょうど蟬が羽ばたいて空に舞つていくように、ちゃんと衣を、そして羽を与えられて、霊なる天界へと旅立っていく。そこにはキリストが待つていらつしやる。それから既に天に召された者たちもまた待つていてくれている。その姿は肉眼には見えない。けれども、永遠の実在者として、そこで新人生歓迎会みたいな形なんでしょうね、

「新人が来た、よく来た、よく来た」と言ってくれる。

### 私の悦ぶ子

「私たちは神さまから、あるいはキリストさまから喜ばれている存在だよ」ということを皆さんに知ってほしい。

「こんな私なんか」

「そうだよ、こんな私なんかと言っているそのあなたのことを神さまは、あなたが立派だから愛するとか、あなたがこういう素晴らしいことをやったから受け入れてあげるとか、そんなのではない。存在そのものを初めつから大切に思つて喜んでくださっている、そういう神さまから見ても、喜ばれている存在だよ」

と。そのことに私は自分で気づいた。聖書の中には、福音書ではあまり出てこない。

「我々が神さまを喜ぶ」

とか。パウロ書簡ではさかんに、

「我々自身が神さまを喜ぶ存在になろう」

と言う。神さまを喜ぶ。しかし、今までは恐がつていた。そうでなくて、

「神さまを喜ぶようになる」

と、それがたくさん出てくる。また、

「そうやってる姿を神は喜びたもう」

ということもある。でも、存在そのものを、



「あなたのことを大事に思っているよ。あなたは大事なんだよ。あなたの存在そのものを喜んでいいるんだよ」

という言葉は、福音書で探しても出てこない。福音書で出てきているのは、キリストに対してだけ出てきている。キリストがヨハネからバプテスマをお受けになった時に、キリストが水から上がって祈っておられると、天が開けて、聖霊が鳩のごとく降<sup>くだ</sup>ってきた。そして、天から声があった。

「これはわが愛<sup>いとく</sup>しむ子、わが悦<sup>よろこ</sup>ぶ者なり」(マタイ3・17)

眩<sup>まぼゆ</sup>い姿に変わられて、そして、モーセとエリヤが現れて、イエスがどのような死に方——つまり十字架——をもって天に昇られるか、それについて相談事をしていた。ペテロとヨハネとヤコブの三人はとまどってしまつて、これは何たることかと。素晴らしい光景を見せてもらったので、

「三つの小屋を作りましょう。そして永遠にここで住みましょう」

なんてうわごとを言っている。そしたら、雲の中から声があつて、

「これは我が愛<sup>いとく</sup>しむ子、わが悦<sup>よろこ</sup>ぶ者なり、汝らこれに聴<sup>き</sup>け」(マタイ17・5)

「これは我が選<sup>えら</sup>びたる子なり、汝らこれに聴<sup>き</sup>け」(ルカ9・35)

と。そういうことが出てくる。そのように、神さまの側から人間存在に対して、

「この人を喜んでいいるよ、あなたを喜んでいいるよ」

という言葉はそこしか出てこないんです。私にはうらやましい。こつちが信じて、「主さま、あなたを愛します」なんて、こつちの方からのごとでなくて、その前に向<sup>むか</sup>ひの方から、

「あなたがどんな者であろうと、私はあなたのことを大事に大事に思っているよ」と言つてくださる。それが欲しい。

### 放蕩息子の話

それがあの放蕩息子の話です。お兄さんは立派な人です。お兄さんは文句なしの立派な人なんです。あまりお兄さんのことは褒<sup>ほ</sup>めてない。しょうがない放蕩息子が悔い改めて帰ってきた時に、親父<sup>おやじ</sup>さんは——ポツンと向<sup>むか</sup>ひに人影が見えた。あれではないか。今まで何度もそう思つたけれども違った。今回は本ものだと——駆<sup>か</sup>け寄つて抱きしめて、

「お前のことを私は好きなんだ。お前のことを待っていた。お前は私の子だ。わが愛<sup>いとく</sup>しむ者だ。心よろこぶ者だ」

と、きつとそう言っているにちがいない。でも、お兄さんは、

「なんだ、あのあなたの息子が——弟とは言わない——さんざん迷惑かけて、もうしょうがなくなくて、スツカラカンになつて帰ってきたら、人前もはばからず出ていって抱きしめて、なんとだらしないこの親父め」

なんて言つて、すごく裁きの目で見ている。ところが、親父さんはそんなことは関係なしに、



とにかく出て行って抱きしめて、

「さあ、いい着物を持ってこい、指輪を持ってこい、ご馳走しろ」

と言って、あれが父親の本当の愛の姿です。神さまの姿がそうです。だから、我々自身が、「こんな自分は愛されるはずがない、自分は神さまに呪われてもしょうがない」

とか、それは全部、自分の判断なんです。そうじゃなくて、神さまの側は、あの放蕩息子に表れたように、我々の存在そのものを喜んでくださっている。そういう喜びの存在としてお創りになった。

それが創世記のアダムとイブの誕生の話でしょ。アダムとイブも本当に無邪気にたわむれて神さまの中で喜んで生きていたところが、つつい自我の芽生えがあつて、独立心が出てきて、それこそ放蕩息子みたいに独立心が出てきて、

「神さまなんか頼らなくても私たちで立派にやっつて、人間社会をつくっていくさ」

と言って、頑張つてきたのが今日の人間社会ですよ。でも、それはとても大変な危機に瀕している。だからもう一度、親父さんのところへ帰って行かないといけないということだと思います。そういう人間の側がどんな姿であつても、

「あなたを私が生んだ。あなたは私の作品だ。あなたのことを私は心から喜んでいいよ」

というのが神さまの御意だと、私は思っています。

## 悦びの存在

先週の「京都キリスト召団 集会だより」に書きました。

《主イエスが父なる神さまにとつて「悦びの存在」であつたように、自分も

というのは私ですね、

主キリストから「汝は我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」と呼びかけてほしい、自分も主キリストにとつて「悦び(喜び)の存在」でありたいと切に願う。どんな立派なことをしたからではなく、存在そのものを喜んでいくと知れば、どんなに勇氣と希望が湧き出ることだろうか。福音書ではこの言葉は主イエスについてだけ記されていますが、旧約聖書イザヤ書40章以降では、主イエスの預言であるとともにイスラエル民族への将来の祝福として度々語られています(イザヤ42・1、60・15、62・4〜5、65・17〜19)。

繰り返して出てきます。ということとは、イエス・キリストに対する預言の言葉と、イスラエル民族に対する預言、祝福とは重なり合っている。イスラエル民族は小さな民族だけでも、神さまにとつては喜びの存在だということが、このイザヤ書の中に出てきます。私たちに関して言えば、

主キリストによつて罪赦され旧き我に死に、新生の命をいただいた(新しき靈なる人



とされた) 私たちも主イエスと同じ「平伏し・従順」の姿でありたい。イエスを喜ばれた場面というのは、普通の人がみんな悔改めて、ヨハネから水のバプテスマを受ける。ヨハネは人々の在り方をすごく叱責しました。

「もう今に神の審判が訪れる。あなた方のようなだらしのない生活をしてたら、絶対に神の審判から逃れられるはずがない」

と言って、ものすごく責めたわけです。それで続々と悔改めのバプテスマを受けに来た。そしたら、そこにイエスもやって来られた、

「私も一緒に受けさせてほしい」

と言われた。ヨハネはびつくりした。

「あなたは別格ですよ。自分(ヨハネ)こそ、あなたから聖霊のバプテスマをいただかなければならない存在なのに、あなたはそんな悔改めなんてとんでもない」

と言った。ところが、イエスは、

「いや、私も変わらないよ」

と言われて、みんなと同じ姿になってヨルダンの水に身を浸された。そして、水から上がって祈っておられたら、この言葉がかかってきた。つまり、イエスは自分を何ものとも思っておられない。自分だけ特別だとも思っておられない。自分も同じだよ。だから、人々が悔改めているそこに

「自分も同じだよ」

と言って、そこまでの平伏し、心砕けた姿。それが神さまに喜ばれた。そんなやつはおらん。だいたい、立派なやつは、自分は立派だと言ってふんぞりかえっている。パリサイというのはそうでしょ。そうではなくて、このイエスの平伏しの姿、従順の姿、神の前に自分を何ものともしていない姿こそが神の喜ばれる姿だということですよ。

私たちの存在を喜んでおられるという神さまの声を日々聞いてゆくことによつて、キリストと同じ姿に変貌する(コロサイ3章1節〜4節)との希望を賜り、同3章12節〜17節において神さまが求めておられるような歩みを実現していくことができます。(「京都キリスト召団 集会だより」2015年10月18日)

「見えるもの」と「見えないもの」

さて、プリントの方にまた戻ります。「見えるもの」と「見えないもの」とは一体、どういうことなのか。

《「見えるもの」と「見えないもの」のコントラスト

「見えるもの」:

人、物、人の言葉、態度、出来事、自然現象など、人の知覚で認識できるもの。



「言葉」は聞こえる。ここでは「人の知覚で認識できるもの」と書きました。目で見えるだけでなく、耳でも聞こえ、手で触れる、そういった確かめることのできるもの。これをここでは「見えるもの」と呼んでいます。それでは、「見えないもの」とは何であろうか。

「見えないもの」:

①「見えるもの」の奥に隠れている(あるいは隠されている)「本質」、「真実」、「不真実」もありません。みかけはとても親切そうだけれども、それは詐欺——オレオレ詐欺だとかいろんなものがありますように——みかけは羊のごとくだけでも、一皮はげば恐ろしい狼であるということもありますので、「本質」、「真実」あるいは「不真実」、そういうものが「見えないもの」。それからもう一つは、

②将来の出来事、将来現れてくるであろう事態(人の生涯において生起する事態や聖書における預言の成就、世の終末、新天地)

たとえば人の将来において起こってくる事態とか、聖書における預言の成就とか、世の終わりとかが、後に現れる新天地とか。そんなものがみな「見えない」将来の出来事です。それから三つ目に大事なものは徴しるしということですよ。

③イエスが言われた「徴」…たとえば、ヨハネ福音書6章におけるパンの奇跡の御業みわざで頭みわされた本質的な事柄、すなわち、イエスは永遠の命であること、イエスを信じる者には永遠の命が与えられるということ(人々はパンに目を奪われて、その御業をもって何を示そうとなさったのかを悟ることができなかった。)

「イエスは二匹の魚と五つのパンで、男だけで五千人を満腹させられた。しかも、残りのパン屑を集めたら十二の籠かごに満ちた」

というお話が出てます。あれは「見える」事態なんです。人々はそれに囚われて、このお方を捕まえておけばパンのことで心配いらん。絶対この人を逃したらいかんよと、みんな追いかけて行って、イエスをとりこにしようとした。ところが、イエスは嘆かれた。

「あなた方はパンをくらって満腹した。それで私を捕らえに来たのだろ。パンではないよ。あのパンの奇跡で何が示されているか」

と。あれはキリストがご自身のからだを裂いて、そして、それを与えられる。それは永遠の生命なんです。しかも、それは溢れてやまない。そういう隠された事態。それを知ってほしかったのに、人々はこのパンというその物に囚われて、

「この人さえ捕まえておけばもうパンのことで心配することはいらない」

と。実に浅はかな考えだったんです。我々も往々にしてそういうことがあるでしょ。バブルの時期だとか、やれ何だとか。株の専門の人は、

「私たちは見えないものを見えます。今はこうであっても、必ずこうなります」

とか言っちゃってますけれども、大体は見えるものにみな囚われて、それでいろんなことを判断してしまう。それは人間の仕方がないことなんですけれども。イエスはそういう人



間の在り方に対して、イザヤ書の預言を引かれました。

《イエスが預言者イザヤの預言を引用されて、「それは彼らが見ても見えず、聞いても聞かず、また悟らない」本当に見てほしいものを見せているのに、それを見ていない。目先のことしか見ていない。聞いても聞いていない。また悟らない。（文語訳…これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聴かず、また悟らぬ故なり）と嘆かれたのも同様である。》

### 不安と重荷

キリストにのめりこんで、キリストに自分を全部預けてしまっている人は案外、気楽な人ですけれども。そうでない人は毎日毎日、心配で心配でしょうがない。これが本来の姿だろうと思います。そうでない人はよほど呑気なんですね。

「ケセラセラ、なるようになる、先のことなどわからない」という歌がありました。要するに、無責任なんです。

「あとは野となれ山となれ、今さえ楽しめばそれでいい。家族、そんなことは私の知ったことではない。誰々、そんなことは放っておけ」

と。要するに、今の自分の在り方だけを楽しんで、もうそれ以外は考えないという、そういう現実主義者といってしまうようか、無責任者といってしまうようか。

ここにも書きました。ところが、真面目な人間はそうはいかんと。

《わたしたちの人生、そして日常生活は、様々の不安定要因に取り囲まれている。

大きさに言えば、「明日、何が起こるかわからない」。他人に起こった不慮の不幸な出来事が、「明日は我が身」かもしれない。》

いろんな事件がありますよね。秋葉原で無差別殺傷事件が起こってみたい、あるいは何か変な建物が倒れてきたりとか、あるいは時には台風で変なものが吹き飛ばされて、それが自分の上に乗っかってみたいとか、あるいはハリケーンによってアメリカやメキシコで凄いいことが起きましたけれども、ああいうことがどこでいつ誰に起こるかわからない。ときには、ゴルフしていて雷に撃たれる人があります。野球をやっていて雷でやられた選手もいます。その他さまざまなが起こっています。ときにはプラットホームから突き落とされて電車に轢かれる方も現れてくる。そういう全然予測もできないことが次から次と起こっています。でも、自分は安全だ、まさか自分には起こらないと思っただけでして、いつ誰に何が起こっても不思議でないのがこの世ではないのか。では、一歩も家から出なければいいか。そうもいきませんね。本当にそういった危険がいっぱいというのが我々の日常生活だと思えます。ですから、

《今日一日を生きるのに精いっぱいなのに、明日のこと、先々のことを考えれば、不安・心配は増すばかりである。誠実な人、真面目な人、責任感の強い人ほど不





安と重荷を背負い込みがちである。》

## 私の過去の姿

これは自分の過去を言っているんです。私はそうだった。家は貧しかったし、兄弟はたくさんいるし、兄貴は我関せずという感じで、次男の私がすべてを背負いこんでいくような恰好かっこうだった。私は自分の恩師にそういう身の上話をしました。

「奥田君、なんで君がそこまで全部背負いこまなければいかんのか」と呆あきれられてしまったけれども。私はそういう感じだった。何もかも自分で背負いこもうとした。他に誰がやってくれるんだ、自分でないとだめではないかと。しかも、自分では背負いきれない。ではどうしたらいいのか。本気にいろいろなことを心配し悩みました。それが高じて、ときにはノイローゼみたいな状況で、生きているのがしんどくなって、毎日毎日が重たかった。

そのときにI君というクリスチャンに出会った。彼は燃えていた。1956年7月7日の夜の9時から12時くらいまで、京都大学の農学部、理学部あたりを歩きながら、星の光の下でI君の話を聞いていた。月の光に照らされていた彼の顔が輝いて見えましたね。

「この人は違う。私はこれだけ悩んで苦しんで、もう明日もしんどい。朝、目覚めたらしんどい。ところが、この人はなんと輝いているのか」と思った。そしたら彼は、

「何を奥田君はそんなに自分で悩んでいるんですか。キリストに全部預けたらそれでいいんですよ」

と。へー、こんな無責任な気楽なやつがおるんだと思いましたよ。本当に彼はその時そのとおりの生活ぶりだった。ですから、ここで、

「誠実な人、真面目な人、責任感の強い人ほど不安と重荷を背負い込む」という、私の過去の姿ですわ。

《このような人間の現実に対して、イエスは「明日のことを思い煩わづらうな、明日は明日みずから思い煩わづらわん。一日の苦労は一日にて足れり」と諭さとされた(マタイ福音書6章34節)。また、

「凡て労する者・重荷を負う者、われきたに来れ、われ汝らを休ません」と慰めの言葉を与えておられる(同11章28節)》

私はその当時、既に婚約しておりまして、その女性に自分の悩みを打ち明けたら、彼女はこの言葉を引いてきました。私はそれに対して、

「そんな無茶な。『明日のことを思い煩わづらうな』なんて、思い煩わづらわざるを得ないから思い煩わづらっているのに、『思い煩わづらうな』なんて言われたってしょうがないじゃないの。『一日の苦労は一日にて足れり』と言われたって、そんなことどうしようもないじ



やないの」

と、そういうふうに思いました。でも、クリスチャンになってから出会った言葉で慰められたのは、

「<sup>すべ</sup>凡て労する者・重荷を負う者、われに<sup>きた</sup>来れ、われ汝らを休ません」

と、この言葉は本当にありがたい言葉です。それと、

「明日のことを思い煩<sup>わづら</sup>うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は

一日にて足れり」

という、マタイ伝の6章25節から34節までのところですか。あれは後になって、あそこを讀み返すと、なんとイエスは親切なひとだなあと思いましたね。

「空の鳥を見よ、何々を見よ」

と、いろいろそういうものを引きながらお話をなさっている。神さまなら、「神を信ずる者はついてこい。嫌だったら、とつとと帰れ」と、これでよかったかもしれない。けれども、

「何を食べようか、何を飲もうかと、生命<sup>いのち</sup>のことで思い煩うな、空の鳥を見よ」

とか、ものすごく丁寧なんです。親切なお方ですよ。そういうようにあとから思うようになりました。

ヒルティ『眠られぬ夜のために』

ヒルティさんのところにある言葉をここで引用しました。次のように言っています。

《ヒルティは『眠られぬ夜のために』の中で次のように語っている。

「見えない世界を「信じる」ことよって歩くか、それとも日常の世界を「見る」ことよって歩くかにしたがつて(コリント人への第二の手紙5章7節:「見える所によらず、信仰によりて歩めばなり。」、人生は非常にちがった相貌<sup>そうぼう</sup>を呈することになる。我々は同一の外的状況の下で、絶望することもあれば、また実に平安に、それどころか幸福でいることもできる。

信仰によつて歩む場合、それにいくらか「想像」がはずかることもあろう。しかし、目に見える事物は、本当に、それが見えているとおりのものであるだろうか。いわゆる「現実の」世界に關しても、我々は、実は全くの謎と仮定の前に立っているのではなからうか。」(2月15日)》

目に見えない世界を信じることよって歩くのか、それとも日常の世界を見ることよって歩くのか。そのどちらかに従つて、人生というものは非常に違つた姿となつて現れてくるといふ。

さきにI君の話をしましたけれど、彼はその頃まだ大学院生ですから、私は助手で給料をもらっている身なんです。うまくいけばちゃんと将来が約束されているわけです。将来は助教授、教授という、ちゃんとそういうルートの中で育てられている。その人間がシヨ



ボンとして

「生きていくのが辛い、朝を迎えるのが辛い」

と言っている。片一方は、何も保証されていない人間なのに、平安の中で心安らかに輝いて生きている。ああ、我々は同じ外的状況——同一の状況どころか、もつとひどい状況のもとでも、彼の方は実に生き生きと平安の中で力いっぱい、自分のやるべきことをやっている。こちらはいろんなことが将来、約束されているのに、希望どころか、

「将来はどうでもいい、今が自分は苦しくてしょうがない」

と言っていたのが私です——同一の状況のもとでも絶望することもあれば、また実に平安に、それどころか幸福でいることもできる。これが人間の常なんですね。

信仰によって歩く場合には、そこにいくらかイマジネーションとか、やはりいろんなことを、将来のこととか想像します。見えない神さまの世界ですから。そこに、

「天国とはどういう所なんだろうか、天国はきつと素晴らしいだろうとか、いろんな想像というものがプラスされてくるだろう。しかしながら、見えている世界、

見えない世界というけれども、見えていると言っているのは本当に見えているの？」

とヒルティは言っている。目に見える事物は本当に、それが見えているとおりのものであるだろうか。

「本当に見ているの？ 上っ面<sup>つら</sup>だけしか見ていないのではないの？ 見ていると言いは

ながら、実は見ていないのではないのか」

と、ヒルティは問いかけている。いわゆる「現実の」世界に関しても、我々は本当は上っ面だけしか見ていないのではないか。その奥にある本もの、本質というものが見えてないのではないかと。だから、見えるものに頼って生きる、歩むということは実は非常に危ない。むしろ、その背後にある——ヒルティにとつては神さまです——その方の導きというものを見て歩く。普通の人から言えば、

「信じて歩く」

ということになります。「信じる」ということも、本当に信じている人になったら、その人は無理してないんですよ、見えているんです。見えないものを霊の眼で見ている。

「信仰とは、望むところを確信し、見ぬものをまこととするなり」（ヘブル11・

1）

と。これもプリントに引用しました。見ているんです、しっかりと認めている。それに自分を委ねて歩んでいるというだけであって、なにか摩訶不思議なものを信じこんで、危ない橋を渡っているという、そんな感覚は全くない。実に確実なものなんです。

「見えるものは一時的であって、その見えない本ものこそがいつまでも続く確かなものである」

という、そういうふうに変転している。これはその世界の中を生きてみないと、なんとも



証明のしようがありませんけれども。

### 必要なのは忍耐

ヒルティさんという方は全部、自分の体験したことしか語っていない。彼はやはりすごい体験をしています。たとえば、キリスト教に関しても、

「ゴチャゴチャと理屈を言わないで、キリストの言われたとおりに歩あゆんでごらん。そしたら、ちゃんとわかってくるよ。キリストの言われたとおりに歩んでごらん、実験してみなさい。ところが、人はいろんな議論はしているけれども、ちつともそれらしく歩んでいない。これではだめだ」

ということをかんに書いてます。だから、

《いわゆる現実の世界に関しても、我々は、実は全くの謎と仮定の前に立っているのではなからうか。（2月15日）

と、こういうことを言ってます。それから、

我々が完全に神の導きに身をまかせるならば、生活を主として苦渋にし、しかも不断の心労をもつてしてもどうにもならない多くの事柄に対して、高貴な無関心を

無責任ではない、高貴な無関心、ノーブルな無関心を

会得えとくすることができよう。しかしこの「軽やかな心」を得るには、神をかたく信じ、

その命令に必ず従うことが前提である。（1月5日）《

と。それからもう一カ所、ヒルティの「11月5日」の項目に次のようなことが書いてあります。

《信仰については実にたくさんの本が書かれていることを、私も知っている。けれども、ヘブル人への手紙10章35～39節と、それに続くすばらしい第11章に含まれているもの以上にすぐれたことは、いまだかつて述べられたことがない。》

このヘブル書の10章35～39節というのは次のような言葉です。

「<sup>35</sup>だから、あなたがたは自分の持つている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。<sup>36</sup>神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。<sup>37</sup>『もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。<sup>38</sup>わが義人は信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない』」

<sup>39</sup>しかし、わたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。」（ヘブル10・35～39）

こういう言葉があるんです。

「あなたがたは自分の持つている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな



報いが伴っているのである。」  
 と。確信というのは見えていないものをつかりとつかんでいる事態です。それには大いなる報いが伴っている。

「神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。」  
 約束のものというのはまだ手にしてません。けれども、必ずそれは頂けるといふ、そういう事柄です。それが実現するには時間がかかる。せっかちになつてはいけません。忍耐がいるんだと。そういうことを言います。

## 二つの型の人間

「もうしばらくすれば、来るべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は信仰によつて生きる。」

「信仰によつて生きる」というのは、見えないものを見ていくことが信仰です。しかも、信仰というものは、勝手にこつちが思い込んでいるのではない。必ず御言がある。約束があるんです。

「必ずあなたをこうするよ」

と。その約束の言葉を受け入れて、「はい」と言つて、それに従つて歩んでいく。

「御言はこう言っている。その御言は必ず成就する」

と、そう受けとつていくことが、信仰と呼ばれている。信ずるとはそういうことなんです。パウロも、ローマ書8章の中で言ってます。

「目に見えていることをなにも望んだり、信じたりする必要はないではないか。もうそこに実現しているんだから。けれども、見えないもの、それに望みをかける。それにはやはり忍耐がいる。そこにはまた呻きもある。御霊もまた我々のために呻いて執り成していただくさる。」

というようなことが、ローマ書8章のところに出てきます。(8・24〜26)

『わが義人は信仰によつて生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない』。しかし、わたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではない

く、信仰に立って、いのちを得る者である。(ヘブル10・38〜39)

これが素晴らしいと。次もヒルティの言葉です、

「ここに言われているのは、今日もなお存在する二つの型の人間の違いである。人間には二種類、二つのパターンがあると。

すなわち、そのような確固たる信仰をもち、どんな事情のもとでもそれを堅持する人と、目に見えるものだけを信じ、

「信じる」というのは、「それは確かだ」と考えるということ。目に見えているものは、なに



も信ずる必要はない。目に見えているものだけが確かだと確信している。そして、それに従ってやって行く利口な人との相違である。そういうグループと、確固たる信仰をもってどんな事情のもとでもそれをしっかりと保つていくという、二つのパターンがあると言う。

この世には、信仰の道よりほかに完全に満足を与えるものがないことをはつきり悟った時に、信仰はゆるぎないものとなる。」

この不安定な世の中を歩いていて、いろんなことを経験して、やはり信仰の道というのが一番完全で安全で、ほかに心に満足を与えるものがないということを経験して悟ったときに、あなたの信仰というものは確固不動なものになりますよと、そういうことを言っているのがこの「11月5日」なんです。二つの型の人間の違いということですよ。

「確固たる信仰をもち、どんな事情のもとでもそれをしっかりと保つ人と、目に見えるものだけを信じ、それに従ってやって行く利口な人」

まあ、皆さんはどちらになるかというところ、言うまでもなく、利口でない。ということはおバカさんという、世の人から見たら

「なんと頼りないものを当てにして歩んでいるか、見ちゃおれん」

と、世の人は我々にそう言うでしょうね。それに対してこつちから見ると、

「頼りない、目に見えることだけに囚われて歩んでいる実に愚かな人よ」

と。まあそういうことです。

### 今見ざれども

プリントに戻りまして、ペテロ書を引きました。

《ペテロ前書1章8節には、「汝らイエスを見しことなけれど、之を愛し、今見ざれども、之を信じて、言いがたく、かつ光栄ある喜びをもて喜ぶ。」とある。》

3節から見てみますと、

「<sup>3</sup>讚むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫に

随い、<sup>4</sup>イエス・キリストの死人の中より甦えり給えることに由り、我らを新

に生まれしめて生ける望を懐かせ、<sup>5</sup>汝らの為に天に蓄えある朽ちず汚れず

萎まざる嗣業を継がしめ給えり。

これはみな見えない世界のことですな。

<sup>5</sup>汝らは終のときに顕れんとて備りたる救を得んために、

これも将来のこと。

信仰によりて神の力に護らるるなり。

神の力に護られている。信仰というのはそれを然りとして、自分は守られているということをしつかり受けとつていくのが信仰ですから。だから、神の力に護られていると。



6 この故に汝ら今しばしの程さまざまの試煉しころみによりて憂えざるを得ずとも、なお大おおに喜べり。

現実には厳しい。迫害もすごかった。だから、見えるところを見たら、とてもじゃない、もうやっていけないというほどの試練、試みにあつても、なお喜んでいる。なお、大いに喜べりと。

7 汝らの信仰ためしの験くは壊くつる金の火にためざるよりも貴くして、

あなた方の信仰というものは、金——銀は書いてないけれども、金は精錬されてだんだん純金に練り上げられていくようですね——そういう、朽ちる金ですら火で試されて、いよいよ貴い純金になっていく。あなた方の試練というものはそのようなものだ。そのようにして試練を通してあなた方はいよいよ素晴らしく変貌していく。

イエス・キリストの現れ給うときほまれ誉ほまれと光榮こうぎと尊貴とうぎとを得べきなり。

その次に引用したところに、

8 汝らイエスを見しことなけれど、之を愛し、

と。そうですね。ペテロの手紙で書かれている人たちは、イエスが生きておられる時には、全然知らなかった。後からの宣教によつて信じた人たちですから。

「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散りて宿れる者」

というような、手紙の相手をそのように言ってますので。

今見ざれども、之を信じて、言いがたく、かつ光榮こうぎある喜よろこび悦よろこびをもて喜ぶ。

と。イエスを見たこともない。でも、本当にまるで眼前にイエスを見ているようにして歡び輝きらいているのではないかと。

9 これ信仰はての極はて、すなわち靈魂たましいの救を受くるに因る。」(ペテロ前1・3〜9)

と、そういうことをペテロ書は言っております。

### 見ぬ物を真実とする

《このように、「見えるもの」ではなく、「見えないもの」に目を注ぐということは、信ずること(信仰)と深いかかわりがあることがわかる。そして、神は人間がそのような「見えないもの」を見つめて(ということとは「信じて」)歩むこと、生きることが望んでおられることがわかる。

ヘブル書11章1節に、「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実まこととするなり。」と記され、それに続けて、このような信仰の道を歩んだ人たちのことが列挙されている。

コリント前書13章には、

「愛は、……凡おおよそ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。愛は長久いっまでも絶ゆることなし。……げに信仰と希望と愛と此の



三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。」  
とあるが、ここに挙げられている「信仰」「希望」「愛」も、「見えないもの」に目を注いで生きることであり、その大切さを教えている。》

ここにあげられている信仰とか希望とか愛とか、これも全部見えないものです。見えないものに目を注いで生きることであるわけです、それが大切だと、これが永遠のものだということを行っています。

このコリント前書13章は結婚式のとときに必ず読まれるところですね。

「愛は寛容にして慈悲あり」

とか、そういうくだりのところですよ。

次にまいります、神さまご自身は見えませんが、しかし、私たちのためにイエス・キリストという方を遣わしてくださいました。だから、見えるイエスが、肉体をまとって来てくださったんですから、これは親切ですよ、神さまは。旧約時代は全然見えない神さままで——モーセの十戒というものとか、いろんな戒めが出てきます。しかしながら、神の姿は見えない——だから、人間は神の形を造りたいんです。でも、

「偶像は造つてはいかん」

と。この点は、仏教は全然違いますね。大仏さんとかみんな人間が造りあげて、そこで「入魂」という儀式をやる。その入魂ということをやると、それがパツと変わるんです。我々から見たら、変わるはずがないと思うんですけども。キリスト教の方は絶対、偶像を造らないということですよ。でも、仏教の方はそういういろいろなものも造って、そこへ入魂の儀式をやるよ、とたんにそれはもう活ける礼拝の対象となっていく。

### 地上と天国をつなぐ拠り所

やはりそのくらいに人間というのは、なにか見えるものにすがりたいんですよ。ときには、撫でたら治るといふのがよくあるでしょ。牛が寝そべっている像を撫でていって、そこだけピカピカ光っているとかな。なでて、そして身体に触ったら効き目があるとか。みんな何か、そういう見えるものにすがりたいんですよ、人間というものは。御神籤おみくじを引いてみて、「ああ大吉だ」と言つて喜んでみたりね。「あんなの本当に根拠があるの?」と聞きたいんだけれども。それは聞いてはいけません。信ずるものは幸いなんですから。

ま、そんなふうには、人間は何か見えないお方を信ずると言いながら、何か形をつくつてそれを拝んだり、離散のユダヤ人たちは常にエルサレムの神殿の方に向かって礼拝をするとか、何かそういうつた拠り所よがほしいんですね、人間というのは。

お墓なんていうのもそういうものだと思います。我々も京都キリスト召団はちゃんと立派なお墓を持っている。そこに名前が刻んである。そのお墓の石碑には、

「我は復活なり生命なり。我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信





ずる者は、永遠に死なざるべし」

という言葉を書きまして彫ってもらい、また別の石碑に名前をずっと刻んで、十五人の名前を刻んで、それでいっばいになって、また裏に刻んでいくということをやりました。納骨ということもやる。骨は土に還ります。でも、私は言うんです。

「では、お墓なんて全く無意味か。見方によっては無意味です。しかしながら、ここに名を刻まれるということによつて、それが地上と天国をつなぐひとつの拠り所になっていく。それでいいのではないか。それ以上でもそれ以下でもない。やはり名前を刻むということは大事なことです。そういった形あるものに名前を刻むことによつて、何か見えるものと見えないものをつないでいくような役割を、お墓は担っているのではないかな」

と私は思つて、そう否定的ではない。囚われてはいけなけれども、否定的ではない。地上と天上を結ぶひとつのよすがとしてそういうものがあると、そのような位置づけを私はしている。

イエスの中に隠されている見えない神

プリントに戻っていただきました。

《神ご自身は「見えない」。しかし、我々のために主イエスを遣わしてください。》

イエスという方は、見えているんです。地上に現れてくださった。だから、私は、神さまは親切だと言いますよ。旧約では、見えない神さまを信じろと言われて、彼らは辛かったと思うけれども、ご親切にも新約の時代には、イエス・キリストという見えるお方を遣わしてください。その方自身は、

「私を見た者は父を見たのだ。私と父とは一つだよ」

と仰つた。イエスという人間に囚われたらだめなんです。イエスという人間の奥に隠されている見えない神さま。キリストは「父なる神」と呼ばれた。

「父と我とは一つなり」

とも言われた。肉体を持つていらつしやるイエスという方の中に隠されている見えない神さまをしっかりと見ていく人は幸いなんです。けれどもイエスという見えるものに囚われて、「この人を捕まえておけば、ご飯の心配はいらない。この人を捕まえておけば、病気は治してもらえます」

とか、そんなふうなことを思っている人間は、本当は見えていない。ここに、

《「見える」イエスにおいて、「見えない」神を見る者は幸いなり。

「我を見し者は父（神）を見しなり」（ヨハネ福音書14章9節）

とあるとおり。また、イエスは何のために地上に来てくださったのか、その目的（神の御計画・御意）を理解できた者はいなかった。弟子たちも洞察することができな



った。》

つまり、弟子たちは、イエスという方はあのダビデ王国、ああいう地上での素晴らしいイスラエルの民の王国を築いてくれるもの、ローマの支配を脱却してイスラエルの独立を果してくれる者として、彼らは受けとった。あるいは、バプテスマのヨハネというのは、

「イエスが来たら、たちどころに正義が実現する、裁きがすぐに現れる」

ということ、悔改めくいあらたをはげしく迫りました。けれども、イエスがなさっていることは、全然そういう裁きというものに関わりがない。病める者を癒したり、貧しい者を訪れたり、罪びとを——罪の女とか、そういった社会から爪弾つまはじきされている者を——いつも大事に護ってあげたりとか、とにかく、世に顧みられていない者、パリサイ人から見たら世の屑くずみたいな者、そういう者を非常に大事になさった。ちつとも審判というような激しいものが現れてこない。

「私が好むのは犠牲ではなく、憐れみである」

とキリストは言われました。また、

「健やかなる者は医者を要せず、病める者がこれを要する。私が来たのは、義

人を招くためではなくて、罪びとを招くためである」(マタイ9・13)

ということを言っている。それで、ヨハネは躓つまずいた。獄中からヨハネは弟子を遣わして、

「私の思いがちがいでしょうか。あなたの他にまだ待つべき方がいらつしやるで

しょうか?」

と、問い合わせる場面まで出てきます。そのように、地上にいた人たちはイエスという方を見ても、全然見えてない。見えるイエスにおいて、本当にイエスの目的とか、神が遣わされたご目的とか、そういうことがわからないで、御利益ごりやく的に利用してみたり、地上のイスラエル王国をつくるという夢を見てみたりとか、勝手な想像をして結局、最後は

「十字架につけろ、十字架につけろ!」

という群衆の声となつて、イエスを十字架につけてしまう。群衆はそういう姿でしょ。

弟子たちだつてそうです。福音書を見ても、キリスト・イエスの本当のことがわかってない。

山上で変貌されたそのあとでも、山からおりたら、

「誰が一番えらいか」

なんてことを言っている。

「俺とお前と二人、イエスの右と左にのぼらせてもらおう」

と頼みこんでみたり。全くイエスという方の本当のことが見えていない。これが福音書に表れている弟子たちの姿です。それをここに書きました。

神の啓示によって初めて明らかに

《また、イエスは何のために地上に来てくださったのか、その目的(神の御計画・御意)



を理解できた者はいなかった。弟子たちも洞察することができなかった。イエスの十字架上の死と復活(輝く霊体としての顕現)に関しても同様である。》

復活というのは、息を吹き返すというようなことではありません。輝く霊体として変貌して顕れてくる。それが復活という言葉で表されている事象です。イエスの場合には、本当に死体が残っていない。我々は、死体は焼かれてしまいます。そして納骨をやりませう。でも、霊なる生命は生きて、そして神さまのもとに迎えられて霊界に入っていくという、これが我々ですけれども。イエスの場合には、肉体そのものが変貌してしまつた。だから、いくら探したって見つからない。当たり前のことです。そういった、

《イエスの十字架上の死と復活(輝く霊体としての顕現)に関しても同様である。その事象(現象)において何を見るか。

これが大事なんです。

イエスが十字架にかけられ、十字架上で死を遂げられたことはその場に居合わせたい人々がすべて肉眼で見た事実・事象であつた。しかし、そこに秘められた見えない事柄(真の事象)は神の啓示(キリストご自身による、あるいは聖霊による)によつて初めて明らかにされる事柄(事象)なのである。》

そこに秘められた見えない事柄、本当の事象、それは何であつたのか。ということとは、神さまの啓示——キリストご自身が示してください、あるいは聖霊が示してください——そういった啓示。見えないものを悟らせてくださるのが啓示なんです。神の啓示。それによつて初めて明らかにされる事象です。

今は、十字架はもうとつと消えて無くなつています。けれども、歴史的にイスラエルで存在していたあの十字架という歴史上の事象は、人の目からは消え去つても、見えない十字架がずっと立っている。その見えない十字架が今、我々に対して言葉を発し続けている、語り続けている。それがコリント書の中で、

### 「十字架の言ことばは

「十字架という言葉——十字架という今は見えないものが我々に向かって語りかけているその言葉——言葉ならざる言葉は、

滅びゆくものには愚かであるけれども、救われる我らには神の力である」(コ

リント一・18)

と言つてます。逆に言うと、この十字架を、「こんなものは愚かなものだ」と言つて蹴飛ばす人間は自らを滅びに定める。しかしながら、

「この十字架こそが私の救いだ。これによつて私は死から生命に変貌させられる」

と。罪をゆるされ、すべてを洗いながしていただいて、マイナスは全部、十字架が吸い取つてくださつて、新しい生命をいただいて、新しい霊的な生命として我々は甦つて、やがてキリストのいらつしやる霊的天国に迎えられるという事象への転換点なんです。我々に



とつてはそうです。これは全く見えない事態です。そういうことは神さまの側が示してくださらなければ理屈でわかることではない、ということをごここで申したかったわけです。

## ニコデモとの対話

《凡そ聖書が伝えようとしている真の内実、天国の事態、「霊」に関わる事柄は、<sup>なまみ</sup>生身の人間が自ずと理解できるようなものではない。パリサイ派の知者ニコデモとイエスの問答の中で明らかである。》

いくら哲学者が頑張つてもだめなんですよ。人間のそういった知的な理解力で天国の事態、霊界の事態、神さまの事態というのはわかりっこない。それはイエスご自身がニコデモとの対話の中で言っておられます。ニコデモはやはり大変な学者で、向こうのリーダーでもあったようです。その智者ニコデモが夜こっそりイエスを訪ねてきた。リーダーたるものが昼間にイエスなんていう所へのこのこ出掛けて行ったら、もうこれは皆から袋叩きにあいますから、夜こっそり行つた。しかし、イエスは凄いいいことは認めている。ですから、

「神さまがご一緒でなければ、あなたがなさっているような、そんな御業はとでもできっこありません」

と、一応持ち上げた。それに対してイエスは全然別の角度からお答えになっています。ニコデモはこう言いました。

「<sup>2</sup>先生、私たちはあなたが神さまからおいでになった先生だということはおよく知っています。神さまがいらつしやらなければ、とてもあなたが行っているいろいろな徴はできるはずがありません。」

と。それに対してイエスは答えられた。

「<sup>3</sup>まことにまことに汝に告ぐ、ひと新たに生まれずば神の国を見ることあたわず」

ニコデモは言う、

「<sup>4</sup>人はや老いぬればいかで生るることを得んや。再び母の胎に入りて生るることを得んや」

「そんなもん、新たに生まれずばと言われたって、今さら年老いた人間がお母さんのおなかに入るわけにも参りませんがな」

と答えた。

「<sup>5</sup>イエス答えたもう『まことにまことに汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ることあたわず。<sup>6</sup>肉により生るる者は肉なり。霊によりて生るる者は霊なり。<sup>7</sup>なんじら新たに生るべしと我が汝に言いしを怪しむな。<sup>8</sup>風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、いずこより来りいず



こへ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者もかくのごとし』(ヨハネ 3・21~8)

と。風はいつどこで生まれてくるのかわからない。「台風23号はフィリッピンの方で生まれました」とか言うけれども、どうやってああいうものが生まれてくるのかわからない。ましてや昔はそんなものは誰もわからない。しかしながら、風が吹いているということはわかる。「ヒュー、ヒュー」という風の音は聞こえる。木の葉が揺れているのもわかる。しかし、風がどこからどのようにして生まれて、どこへ行くかとしているのかわからない。今なら、気象衛星で全部的確につかまえていますけれども、昔の時代ですから全然わからない。だから、霊によって生まれるということもそういうことなんです。人間がお母さんからオギャアと生まれてくるのは、みんな目で確かめて、「ああ、おめでとうございます。お坊ちゃんでした」とか、「お嬢ちゃんでした」とか言ってみんな喜んでる。けれども、

「霊によって新たに生まれるということは、誰も肉眼で確かめたりすることのできる事態ではない。これは全然違うんだ。ニコデモさん、そんなお母さんのおなかに入るなんて、そんなこととは違うんだよ」

と言って、イエスはニコデモにお答えになったわけです。

肉から生まれるものは肉、これは自然的な生まれです。自然的な生まれで生まれてきた人間のことを法律学では、「自然人」という。でも、神の霊によって新たに生まれた人間は「霊人」、これは法律学にはないんです。法律には、「法人」というのはありますけれども、これは人間がつくりあげたもので、霊人というのはない。でも、神さまの世界では、「霊によって生まれた者」こそが「霊なる人」である。この霊なる人だけが神の国に入っていく。神の国の、見えない事態の中を歩くことができる。そういう存在なんだよと。

ますます、このニコデモは混乱しました。「そんなことが一体あるんですか」と。それに対してイエスは、

「あなたはイスラエルの先生だろ。こんなことがわからないのか。私は自分の体験したことだけを話しているんだよ」

というように仰った。そういうくんだりはこのヨハネ伝の3章の所に出て来ます。

### 見えない永遠の霊的実在者

ですから、ここに書きましたように、そういう見えない事柄、天国の事態、そういうものは生身の人間が自然にわかるといって、そういう性質のものではない。

《人新たに生まれずば、神の国を見ること能わず。神の国に入ること能わず》とイエスが語っておられるとおりである。

地上に生きる私たちの姿(肉体を備えた自然のままの私たち)は「見えるもの」であり、五感で知ることのできるもの、肉体だけではなく、心や精神の状態も科学や医学



の目で確かめることができるという点で、「見えるもの」である。肉眼では見えないけれども、別の形でいろいろ見えるものです。

そして、誰にでも終末(死)が訪れ、人は土に帰る。それだけを見れば、儂い存在であり、「死」はすべての終りであり、人生は「空の空なるかな」の嘆きを伴う。しかし、神は御子イエスによって、死んでも死なない命(永遠の生命)を信ずる者にお与えくださった。この命は「見えない」。しかし、復活されたキリスト(輝く霊体となって顕現してくださったキリスト)は、最早、「見える肉体」の存在ではなく、「見えない、しかし、生きて在り給う永遠の霊的実在者キリスト」なのである。

これが私たちが——相手にしているという失礼ですけれども——このイエスさまのことを私たちはしっかりと見つけ、つかまえていく。あるいは、この方につかまえられていく。そういう歩みをしていく存在なんです。

そして、信ずる者に同じ栄光の姿を与えると約束して下さっている。ここに私たちの希望がある。コロサイ書3章3〜4節に、

「**汝らの**生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

とある。》

ここのとこをちよつと前後から聖書で確かめてみたいと思います。コロサイ人への手紙の3章の1節から3節を読みますと、

「**汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、**

あなた方はもうキリストと一緒に甦ってしまった存在ではないか。あなた方の本質は——今見えているのは肉体のあなた方——しかし、あなたの本質というのはもうキリストと一緒に甦らせていただいた、それがあなたの本当の姿である。そうである以上は、求めていくものは地上のことではない。天上のものを求めていく。これは当然だねと。キリストさまがあそこにいらつしやる。

キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。

従つて、

<sup>2</sup>汝ら上にあるものを念い、<sup>1</sup>地に在るものを念うな、<sup>3</sup>汝らは死にたる者にして、<sup>4</sup>其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」(コロサイ

3・1〜4)

とあります。あなた方の生命はキリストの中、キリストと一緒に神さまの中に隠されてある。肉眼では見えない。しかし、実在する。キリストが顕れてくださる時に、あなた方も同じ栄光の姿となって顕れてくるんだよと。これは初代の人たちの信仰における望みだったと思います。だから、少し先へ行きますと、このコロサイ書でも9節に、



「<sup>9</sup> 汝らは既に旧<sup>ふる</sup>き人とその行<sup>おこない</sup>為<sup>な</sup>とを脱<sup>だ</sup>きて、<sup>10</sup>新<sup>あらた</sup>しき人を著<sup>き</sup>たればなり。この新<sup>あらた</sup>しき人は、これを造<sup>つく</sup>り給<sup>たま</sup>いしもの<sup>かたち</sup>の像<sup>しな</sup>に循<sup>したが</sup>い、いよいよ新<sup>あらた</sup>になりて知識<sup>ちしき</sup>に至<sup>いた</sup>るなり。」(コロサイ3:9-10)

という言葉も出てきます。だから、このコロサイ書は、

「あなた方は自分の見える姿、見える在り方、それに囚<sup>こ</sup>われてはいかん。あなた方の本質<sup>ほんしつ</sup>というのは実は見えない。しかしキリストと同じ姿<sup>すがた</sup>になつて顕<sup>あ</sup>れてくる。そういう実在<sup>じざい</sup>のあなたというものはもう出来上<sup>できあがり</sup>がつているんだよ」

と。これは私たちが肉体を脱<sup>だ</sup>ぎ捨てた時、この地上の体が破<sup>やぶ</sup>れた時、その時に私たちはそういう霊<sup>たま</sup>体をたまわりますし、それが現<sup>ま</sup>実に人の前に顕<sup>あ</sup>れてくるのは、当時<sup>たぎ</sup>だったら、キリストの再臨<sup>さいりん</sup>と言<sup>い</sup>っている事<sup>こと</sup>態<sup>たい</sup>ですね。その時にはつきり顕<sup>あ</sup>れてくるという。

### 新入生歓迎会

キリストの再臨<sup>さいりん</sup>ということは、聖書<sup>せいしょ</sup>でたえず言<sup>い</sup>われていますけれども、まだそれは実現<sup>じつげん</sup>していません。私自身<sup>わたし</sup>はどうなんだと言<sup>い</sup>われたら、あまり再臨<sup>さいりん</sup>ということ願<sup>ねが</sup>っていません。それよりも、私<sup>わたし</sup>がこの世<sup>よ</sup>を去<sup>さ</sup>った時、地上<sup>ちじょう</sup>の体が壊<sup>こわ</sup>れた時、直<sup>ただ</sup>ちにキリストに迎<sup>むか</sup>えられて、キリストに顔<sup>かほ</sup>と顔<sup>かほ</sup>を合<sup>あ</sup>わせて、目<sup>め</sup>と目<sup>め</sup>をあわせて、ニッコリと微笑<sup>わいごう</sup>んで、

「おお、ようやくたね!」

「はい、やりました!」

という、監督<sup>かんとく</sup>と選<sup>せん</sup>手が抱<sup>かか</sup>り合<sup>あ</sup>うような、そういう姿<sup>すがた</sup>をイメー<sup>い</sup>ジして<sup>して</sup>いるんですよ。そこには必ず、先に召<sup>よ</sup>されてい<sup>い</sup>った者が横<sup>よこ</sup>に並<sup>なら</sup>んで、ニコニコ、ニコニコ、待<sup>まち</sup>っていてくれる。そういう新入生<sup>しんじゅうせい</sup>歓迎<sup>かんげい</sup>会<sup>かい</sup>、それが用意<sup>ようい</sup>されている。それが私の希望<sup>きぼう</sup>ですね。

「そんな再臨<sup>さいりん</sup>なんて、いつ起<sup>おこ</sup>るかかわかんことを待<sup>まち</sup>ってられますかいいな」

と言うと、叱<sup>のの</sup>られるかもしれない。内村<sup>うちむら</sup>鑑<sup>かんとく</sup>三<sup>さん</sup>も再臨<sup>さいりん</sup>運動<sup>うんどう</sup>をや<sup>や</sup>つてみたり、いろんなことをな<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>つた。でも私は、キリストの再臨<sup>さいりん</sup>はそれ結構<sup>けつこう</sup>だけれども、その前にこの地上<sup>ちじょう</sup>の体<sup>てい</sup>を脱<sup>だ</sup>ぎ捨てた<sup>すて</sup>とたんに向<sup>むか</sup>こうでちゃんと迎<sup>むか</sup>えられるという、新入生<sup>しんじゅうせい</sup>歓迎<sup>かんげい</sup>会<sup>かい</sup>をや<sup>や</sup>つても見えるという、それが私にとつてもものすごく間近<sup>まぢか</sup>なんです。

すぐなんです。そうでしょ。あと10年<sup>じゅうねん</sup>あるかな。皆さん、どうですか。そういうのを間近<sup>まぢか</sup>にする、本当に目の前<sup>まへ</sup>に来て<sup>き</sup>ると。だったら——それまで5年<sup>ごねん</sup>なのか10年<sup>じゅうねん</sup>なのか15年<sup>じゅうごねん</sup>なのかわかりませんよ——でもそれが間近<sup>まぢか</sup>であるということ<sup>こと</sup>を常<sup>とこ</sup>に見<sup>み</sup>つめながら、今<sup>いま</sup>というものをし<sup>し</sup>つかりやるんです。短<sup>みじ</sup>いからこそ今<sup>いま</sup>をし<sup>し</sup>つかりやる。いつ来る<sup>くる</sup>かわからない、のんび<sup>のんび</sup>んだりりと、

「明日<sup>あした</sup>もまた今日<sup>けふ</sup>のごとくあらん」

なんて、エンドレスに続<sup>つ</sup>いてい<sup>い</sup>つたら、人間<sup>にんげん</sup>やりきれませんよ。そう思います。

浦島<sup>うらしま</sup>太郎<sup>たろう</sup>は龍宮<sup>りゅうきゆう</sup>城<sup>じょう</sup>で月日<sup>げつじつ</sup>の経<sup>へ</sup>つのを忘<sup>わす</sup>れて遊<sup>あそ</sup>び耽<sup>ふけ</sup>っていた。気が<sup>き</sup>ついてみたら、



「そうだ、私は帰らなければならぬ」

「というので地上へ帰って来たら、誰もおらん。みんな死んでしまっている。自分独りです。」ああ……」と思つて、玉手箱をあけたら、老人になつたという、お目出度い話ですね。あんなので若々しい浦島太郎が独りぽつんと生きていたら、ロビンソン・クルーソーみたいな全く寂しくてしようがなかつたと思ひますけれども、彼もちゃんとふさわしい老人になつて、いつ亡くなつたとは思ひてないけれども。

あの龍宮城というのは楽しかつたんでしようね。でも、天国はもつと楽しいにちがひありませんから、皆さん。鯛たいやヒラメの舞踊りなんてあるかどうか知りませんよ。乙姫おとひめさまがいてくれるかどうかも知りません。でも、本当に素晴らしい世界、これが私たちのために用意されている霊界です。何よりもそこにキリストがいてくださるといふのがすごい、私にとっては喜びですね。実際、私たちは今見てないんですもの。キリストは直接顯れてくださつていないんですもの。

「見ずして信ずる者はさいわいな」

と仰つている。肉眼では見ていません。けれども、肉眼で見えないイエスという方をしつかりと見るかのごとくに見つめて、その方に頼つて、その方に委ねて、そして何よりもその方が喜んでくださるような生き方をしたい。そうでしょ。やっぱり、自分が大事に思つている方が自分のことを喜んでくださつている、そういう在り方でありたい。それが先程申しました、

「汝はわが愛いとくしむ子、わが心こころにかなう者、わが悦よろこぶ者なり」

という言葉なんです。こつちが神さまを悦んでいるだけではない。向こうの方も、向こうさまもこつちを悦んでくださつている。悦んで待つてくださつている。そういう相思相愛の関係が成り立っている。それでこそ、この短い人生——いや本当に私は皆さんよりも年配ですから、皆さんよりも短いにちがいない。先越さないでくださいね、私は皆さんの葬式をやるのは嫌ですから。私の方が先に行くにちがいない——しかし、私にとつてこの人生というものはすごく充実したものでなければならぬ。短ければ短いほどそれが充実した永遠なる一日一日でありたいという、そういう願いがこみあげてまいります。

老人ホームでこんな話を

私は実は、老人ホームとかそういうつたご老人の方々が住んでいらつしやる所でこんな話をしたいんですよ。

「あなた方、将来は明るいですよ。それには一つ条件がある。その明るさをくださるお方と合体しないと。明るさをくださるお方と一つにされたときに、その方が引つ張り上げてくださる。死というやつが地上からあなたを引きずりこんで墓場へ連れて行くこうとしている。それに対して、神さまの方は霊の力で引き



上げようとしてくださっている。これの引っぱりっこをやっている。綱引きをやっている。その時に、あなたの心が天に向かうならば、向こうに引かれて行きます。あなたの心が闇に向かえば、闇の力が引きずりこんでいきます。あなたはどちらですか。

それはもう皆さん、例外なく、光の国、永遠の生命、喜び、讚美できる世界でしょ。今はヨボヨボでも、今は身体が不自由でも、全然自分の思うとおりに身体が動かなくても、逆に、向こうに行ったら、向こうへ行く時は解放されるんですよ。病気の方は病気から解放放たれる。いろんな不自由な方は不自由から解放放たれる。そして、霊の翼をいただいて、向こうで思う存分、羽ばたける。それがちゃんとイザヤ書では35章で約束されている。そういう神さまの約束はゆるがない。人間の約束は頼りない。けれども、神さまの約束は絶対にゆるがない。だから、それを信じて、輝いてください。

ペテロ書に書いてある。ペテロの書いている相手方の人たちはまだイエスを見たことがない。けれども、もう喜んで輝いている。

「イエスを見しことなけれど、これを愛し、その喜びで輝いている」

という。そういう姿こそが、神さまが喜んでくださる姿だ。あと短い人生かもしれない。でも、それを喜んで、充実して、毎日毎日、「アーメン！ ハレルヤ、ハレルヤ！」と言う。そうやって、晴れ渡った澄みきった心根でいく。そうしたら、自然と笑みがこぼれ、みんなで仲良くなっていく。みんなでお互い相愛することができるようになる。これは全部、神さまからの祝福です。これは目に見えないですよ。信仰も希望も愛も見えない。神さまも見えない。また、キリストは言われた。

「あなた方は人の前で見栄をはって祈るのではなくて、戸を閉じて、隠れたるところにいらっしやる見えない神さまに、あなた自身も人の目から隠れたところ

で祈りなさい」

と。みなそういう、見えない世界を大事にしておられるキリストの言葉です。我々は日頃、自分の想像では考えもできなかったような素晴らしいものが備えられている。だから、人生は素晴らしいんだ。あなたはもうその素晴らしい晩年に生きている。いよいよ——『はよう、お迎えがきてくれんかな』なんて言っている人がおるようですけれども——そのお迎えが、神さまの方からの天使たちが迎えにきてくれたら、どんなに素晴らしいか。それはもう、その喜びというのはすごいですよ。私はそのようにして行きますからね。」

と。そういう話をその方々に話したいんですよ。誰か紹介してください。門前払いさえないなければ、やっぱりそういう話を私はしたいですね。



## 旧き人間と新しき人

ローマ書といいますが、非常にパウロ神学がそこで展開されているとか言う。特に1章から8章の終わりまで。9章、10章、11章はユダヤ人の救いの問題を取り上げている。12章からまたキリスト信徒たちの生活規範を語っています。1章から8章までは、パウロ神学を展開しているとか、そんなふうに理屈っぽく考えている人が多いようですけれども、実はその8章に極まるところは、神さまは見えない絶対愛の世界を展開しているんです。そのことをここで書きたかった。

《旧き人間とキリストによつて新しい誕生をいただいた「新しき人」との対比を霊的な見えない次元において明らかにしているのがロマ書8章。ここでは「見えない神」とその深い「愛」の勝利の高らかな宣言である。

と、これが私のローマ書8章に対する見方です。それから、

福音書も使徒書簡も、いや、新約聖書の全体が、「見えるもの、見える現実」に捉とらわれることなく、その奥に隠されてある「見えない、神・キリストの無限の愛(恵み)」を私たちが全存在的に体受して生き生きと生きるようにとの励ましと祝福に満ちているのである。

道徳的な教えではないんです。本当に祝福の世界にあなた方を引き入れてあげよう、引き上げてあげようという、そういう愛の励ましの言葉、約束なんです。

これを宣言しているのが、エペソ書3章16〜19節である。すなわち、

「父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、

「内なる人」は見えないです。

信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、

これも見えない。心も見えない。そこにキリストに住んでいただく。

汝らをして愛に根もとざし、愛を基もととし、凡すべての聖徒とともにキリストの愛の広さ・

長さ・高さ・深さの如何ばかりなるかを悟り、その測り知るべからざる愛を

知しることを得しめ、凡すべて神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を」

これがエペソ書における祈りなんです。このエペソ書の著者はずっとパウロだというふうに信じられてきましたけれども、どうも聖書学者たちは、「パウロではない」ということを言っているようです。けれども、中味は素晴らしい。口語訳で言いますと、

「どうか父が、その栄光の富にしたがひ、御霊により、力をもつてあなたがた

の内なる人を強くしてくださいるように、

「父」なる神さまも見えません。「栄光の富」も見えません。「御霊」も見えません。「力」も見えません。それから、「あなた方の内なる人」も見えません。でも、それを相手にして、見えない方が見えないあなたの内的な人を強くしてくださいるようにと。

また、信仰によつて、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがた



が愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。」

と。全部、見えない世界のことです。その祝福が素晴らしいんだよということを言っています。

あなたに永遠の生命を与えよう

ですから、どうぞ、皆さんが聖書をお読みになる時に、何か教えの書で窮屈な堅苦しいことを道徳的に書いているんだという見方ではなくて、我々の自然的な、ついつい目の前のことにとらわれたり、一喜一憂したりという、そういうガタガタしている人間、あくせくしてしている人間、その渦の中に巻き込まれて生活している人間——確かに日々は大変だと思えますよ、不況の時代は。けれども、そういう不況であろうが何であろうが、食べるものがなくなろうが、どういう試練に見舞われようが、現実はそうであっても——その奥に、またその背後に、ちゃんと神さまのお計らいがある。あなたは神さまに愛されている子どもなんだ。キリストはあなたのことをとつても大事に思ってくださいっている。だから、あなたに永遠の生命を与えようとして十字架にかかってくれました。十字架なんて自分に関係ないと思っていたけれども、実はそうじゃなかった。あなたの死というものを既に十字架が背負っている。

あなたの罪という、つまり神さまに対する逆らいです。自我を立てる、自己中心で生きる、そういう神さま抜き生き方、これが「罪」なんです。あなたの罪を全部、キリストは十字架でゆるしてくださっている。あなたがもし裁かれるとしたら、その受くべき裁きを全部キリストが引き受けたのがあの十字架だったんだよと。

そして、あなたに永遠の生命を与えるため、あなたが本当に神の子らしく生き生きと生きていくために、神はあなたに生命を与えられた。その生命が十全に、しかも霊的なレベルで輝いて生きるように神さまのご計画があつて、それが時満ちてキリストによって成就した。この神さまの雄大なご計画、その中にあなたは巻き込まれているんだよ。神のご計画は必ず成る。必ず素晴らしいものに変貌するんだから。それが実現することを、既に然りとして、将来に起こることを然りとして受けとつていく。そして忍耐強く日々を歩んでいく。

「約束のものをいただくのに必要なものは忍耐である」

と、ヘブル書に出てきましたね。そして、一步も退かない。ひたすら前に向かって進む。

そういう雄々しい生き方。それを神・キリストは望んでいらつしやるし、力を与えてくださる。そして、



「神さまの子どもたちが生き生きと、嬉々として喜んで生きている姿こそが神の喜ばたもうところだ。あなた方お一人お一人がみんな、神さまに愛されている大事な大事な子宝なんだよ」

と。そういうことを本当にすべての人が知ってほしいですね。どんなところにいらつしやる方も、アフリカの方々も、インドの方々も、アメリカの方々も、日本、中国、どこの方々だって、このちつぽけな地球なんです。

### 一人びとりはその実験材料

大宇宙から見たら、本当に地球というものは米粒みたいなものらしい。宇宙というのはいくつもあるらしい。まだ知らない宇宙がいっぱいあるそうですよ。これは自然科学者が言っている。もの凄いものらしい。そして、絶えず膨張しているようです。太陽が将来どうなっていくのか、それは我々はわかりませんが、とにかく、あの大自然、宇宙の科学をやっている方なんていうのは、もの凄いスケール of 思想を持たざるをえないんじゃないかと思えます。それらも自然にできあがったものではなさそうなんです。それも全部、神さまの御手の中にある。

ヒルティはさかんに言っている。

「この宇宙というものが規則正しく運行されて、今にいたるまで破滅していないのは、そうやって管理している管理者を考えないと、想像もできないではないか。そういう宇宙をしっかりと掌握している方がいらつしやるからこそ、地球も宇宙も無事に今までできたのではないか。その一事を見ただけでも、神なんかいないなんていうのは実に愚かなことだ」

ということをヒルティは言います (『眠られぬ夜のために 第一部』(岩波文庫) 1月27日の項参照)。それから、

「キリストを信じたいならば、キリストの言葉を大事にして、キリストの言葉とおりに生活してごらん。そうしたら、おのずと答えが出てくるから。議論はいらない。

やってみなさい」

と。「やってみなはれ」と(笑)。そういうことをヒルティは言う。ヒルティさんというのは哲学者ですけども、非常に実践家、実務家です。私も、学問はどちらかというと理論派であって実務家ではないけれども、信仰の世界では実務家でありたい。日々生活の中で神の御言を、<sup>みことば</sup>キリストの言葉を自分の生き方で確かめつつ、確かめつつ、

「本当でしたよ」

と人々に証明していく。そういう生き方をしたい。皆さん一人ひとりが、キリストの証人ということとは、

「証明しろ」



ということですが。証明というのは、自然科学なら実験を繰り返してデータを集めて、「こうでした」というんでしょ。だから、皆さん一人びとりはその実験材料なんですよ、神さまから見たら。一人ひとりの人間がみんな神の御言とおりに歩んでいったら、みなそのとおりになった。これだけの人間が実証しているんだから、これはもう疑い得ないでしょうと。神さま自身は見えない。でも、見える神の子どもたちがみんなその御言とおりに歩んでいて、そのとおりに、約束とおりになっている。これは凄いです。だから、

「あなた方は証人です」

と言われているのは、

「あなた方の生活自体によって神の言葉がまことであるということを表していきな

さいよ」

ということですよ。

### この世に遣わされた派遣社員

そういう意味で、私たちは神さまからこの世に遣わされた派遣社員でございます。やがて、派遣社員の仕事が終われば、また本国へ帰っていく。

「わが国籍は天にあり」

と。国籍が天にある人間が地上に遣わされている。一番先に遣わされた派遣社員はキリストご自身です。神の御座みくらを捨てて人間の形をとって生きてくださった。

サンダーシングという方が言っているんですよ。

「イエスという方が地上におりてきて、人間どもの中で生活して、さぞ生き苦しかっただろうね」

と、そういうことを書いています。キリストは天界を離れて地上に人間として生きてくださった時に、わずか三年半——伝道は三年半、子どもたちからいうと三十年間ということになりますけれども——「さぞ生き苦しかっただろうな」と、サンダーシングは言うんですよ。でも、それに堪えて、下々と交わって、一緒に生活をして、そして天国という見えない、しかも本当の生命、喜び、そういうものを皆さんに提供してくださった。そして、仕事を終えて、神の御許へお帰りになった。

「かぐや姫」は、みんなが守って、「行かんでくれ、行かんでくれ」と頼んでいるのに、スツと帰って行ったでしょ。あれは何も犠牲を払ってない。

「月から来たから月に帰らなければなりません。お爺さん、お婆さん、さよなら」と言っただけで帰って行った。

キリストも、神さまから来たんだからまた神さまへ戻っていく。任期満了で帰ってきたんですよ。ところが、帰る前にあれだけの苦難を背負わねばならなかった。しかも、サンダーシングは言っているんですよ。



「キリストが背負った苦難はあの十字架だけではない。地上で生きておられる間、全部が実は苦難であった」

と。そうでしょ。神さまの子ども、神そのものでいらっしやるような方が罪深い人間社会で仲良く暮らしていくというのは大変なことです。水と油です。しかし、それをキリストは本当に人々の中に溶け込んで、皆さんを喜ばして与えるばかりです。「ギブ・アンド・ギブ」ですよ。完全に素晴らしい栄光の姿に変わらざるをえませんわ。

だから、「十字架がどうだ、復活がどうだ」なんて、そんなことを理屈で考えたって、全くナンセンス。あれほどの方がああいう素晴らしい変貌をして顕れてこなかったら、神も何もない。ああいう姿で顕れてくださった。そして、みんなもそれにあやかっつて、我々も全部それにあやかっつていただいて、同じ栄光の姿に化せられる——コロサイ書3章でありましたように——そういう凄じい約束を我々にしてくださっている。

これも見えませんから、信ずるほかにありません。しかし、それは当てにもならないものをただ信じているんじゃない。神さまの御言、神さまの御意、それが着々と成就していく。旧約から始まって。そういった確かな神さまのご計画と御言、預言、そういったものに支えられ、そしてキリストの言葉があつて、キリストの生涯がある——それからそのあとは、パウロとかいろいろんな人たちが活躍してくれました。現代ではサンダーシングだとか——そういう方が直接キリストと問答を交わしていますもの。また、霊界に導かれて、キリストと問答してまた帰ってきたような人のお話も最近聞かされたりもします。

### 別次元の本当のリアリティ

そういう、私たちが見ていない、肉眼で見えない、手で触れない、しかしながら、本当の実在こそが永遠に続くんだと。今日の一番始めの出だしの言葉ですね。

「見えるものはしばらくだ。しかしながら、見えないものは永遠に続く」とありました。

「我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々あらたに新なり。それ我らが受くる暫くしばらの軽き患難なやみは、極めて大なる永遠とこしえの重き光栄を得しむるなり。

これは自分らのことを書いてますけれども。

我らの顧みる所は見えるものにあらず見えぬものなればなり。」

この「見えぬもの」は本当にそういった神さまの世界です。神が我々のためにご用意くださったっている別次元の本当のリアリティ、本当の実在界です。それに比べれば、地上というのは仮の姿だそうですね。何かネガとポジみたいに、この地上の姿というのはネガだそうですね。本当のポジの世界というものはもの凄じい素晴らしい、輝いている世界だそうですね。ですから、ものには順序がある。コリント前書15章でパウロが言ってます。



「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに甦る。形あるもの(肉のからだ)で蒔かれ、形なきもの(霊のからだ)に甦る。」(コリント前15・42〜44)

まず「形あるもの」、見えるものが出てきて、それが次に、「見えない永遠なるもの」にと変貌していく。これが神さまの創造の秩序というか、摂理だそうです。そういう角度から新約聖書あるいは旧約聖書を、イザヤの預言だとか、そういうものを読み直していただいたら、また新しいものが見えてくるかも知れません。

ということ、今日のお話は終りにしたいと思います。

## 祈り

では、ひとことお祈りいたします。

輝かしい秋の日、お一人お一人をそれぞれの所からこの集会所にお導きくださり、ありがとうございます。ここに集っていらつしやった方は、見えるものではなくて見えない本当のものを求めて、やっていらつしやいました。見えない本当のものは実にあなたご自身であり、あなたご自身が私たち一人ひとりのために備えてくださる事態でございます。

主さま、信仰という言葉で表される事柄は、本当にあなたの約束を、あなたの御言葉を、既に得たりとしてしっかりとつかまえ、その中に身を委ね、そして歩んで行く一日一日を申します。人々に見えるものだけを頼りにして一喜一憂いたします。私どももかつてはそうでした。しかしながら、あなたは見える世界に私たちを置きながら、

「目のつけどころを見えない本当の世界に、本当のリアリティの世界を見ていくんだよ」

と。この朽ちる種で蒔かれ、肉体というこの宿をいただきましたけれども、この宿を去るときには、素晴らしい天国という世界が用意され、そこで新しい翼をいただき、命を飛ばたかせて住まうことができる、その命を既にこの世で地上であなたはくださいました。

御子キリストが来てくださったのは、我々にそうした本当の命を植えつけるため、古き我に死に、新しき我に甦り、そしてあなたの命をいただき、あなたと同質の霊的存在としてあなたによって迎えられる、その日を目当てにしてこの地上の一日一日をしつかりと歩んでいく、そういう修練の場としてこの地上の命を備えてくださいました。

「約束のものを受けるのに必要なのは忍耐である。退いてはならない。退くものを神は喜ばれない」

とあります。新約聖書はそのような励ましと希望と約束に満ちています。見える地上で経済問題、政治問題、社会問題、いろんなところで問題だらけ、八方塞がりでございます。あなたの世界は常に開かれてあります。

主よ、永遠なるあなたさまにこの身を委ね、地上の多くの人たちが本当に神の子らしく地上を生きていく時、この地上自体がまた輝かしいものに変貌してまいります。どうぞ、



そのために私たちをお用いください。私たちがあなたの証し人として生活させてくださいますように。今日お集まりの方々の上に、またご家族の上に、心にかかっているの方々の上、どうぞ、あなたの力強きおん顧みと恵みが豊かにございますように、心からお祈りいたします。

この感謝と讃美と祈りを貴き主イエス・キリストの御名に在ってお祈り申し上げます。  
アーメン

## (参考) キリスト道講演会 講演レジュメ

「見えるもの」と「見えないもの」——真に永続するものを求めて——

要旨 私達は日常生活において、「見えるもの」に心を奪われがちですが、「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」との聖書の言葉を大切にして、どんなときにも「神さまのご配慮と導き」に委ねて歩みたいと願います。

聖書の言葉 (コリント人への第二の手紙第4章16節〜18節)

「文語訳」「この故に我らは落胆せず、我らが外なる人は壊れるけれども、内なる人は日々あらたに新なり。それ我らが受くる暫くかろの軽き患難なやみは、極めて大なる永遠とこしえの重き光栄を得しむるなり。我らの顧みる所は見ゆるもののあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時しばらくにして、見えぬものは永遠に至るなり」。

「口語訳」「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」。

「見えるもの」と「見えないもの」のコントラスト

「見えるもの」:

人、物、人の言葉、態度、出来事、自然現象など、人の知覚で認識できるもの。

「見えないもの」:

① 「見えるもの」の奥に隠れている(あるいは隠されている)「本質」、「真実」、「不真実」

② 将来の出来事、将来現れてくるであろう事態(人の生涯において生起する事態や聖書における預言の成就、世の終末、新天地)

③ イエスが言われた「徴」..例えば、ヨハネ福音書6章におけるパンの奇跡の御業で顕わされた本質的な事柄、すなわち、イエスは永遠の命であること、イエスを信じる者には





永遠の命が与えられるということ(人々はパンに目を奪われて、その御業をもって何を示そうとなさったのかを悟ることができなかった。)

イエスが預言者イザヤの預言を引用されて、

「それは彼らが見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らない」

(文語訳…これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聴かず、また悟らぬ故なり)

と嘆かれたのも同様である。

わたしたちの人生、そして日常生活は、様々の不安定要因に取り囲まれている。大げさに言えば、「明日、何が起こるかわからない」。他人に起こった不慮の不幸な出来事が、「明日は我が身」かもしれない。

今日一日を生きるのに精いっぱいなのに、明日のこと、先々のことを考えれば、不安・心配は増すばかりである。誠実な人、真面目な人、責任感の強い人ほど不安と重荷を背負い込みがちである。このような人間の現実に対して、イエスは

「明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一

日にて足れり」(マタイ6・34)

と諭された。また、

「凡て労する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません」(マタイ

11・28)

と慰めの言葉を与えておられる。

ヒルティは『眠られぬ夜のために』の中で次のように語っている。

「見えない世界を「信じる」ことによつて歩くか、それとも日常の世界を「見ること」によつて歩くかにしたがつて(コリント人への第二の手紙5章7節：「見ゆる所によらず、信仰によりて歩めばなり。」、人生は非常にちがった相貌を呈することになる。我々は同一の外的状況の下で、絶望することもあれば、また実に平安に、それどころか幸福でいることもできる。

信仰によつて歩む場合、それにいくらか「想像」があずかることもあろう。しかし、目に見える事物は、本当に、それが見えているとおりのものであるだろうか。いわゆる「現実の」世界に關しても、我々は、実は全くの謎と仮定の前に立っているのではなからうか」(2月15日)

「我々が完全に神の導きに身をまかせるならば、生活を主として苦渋にし、しかも不断の心労をもつてしてもどうにもならない多くの事柄に対して、高貴な無関心を会得<sup>えとく</sup>することができよう。しかしこの「軽やかな心」を得るには、神をかたく信じ、その命令に必ず従うことが前提である」(1月5日)

ペテロ前書1章8節には、

「汝らイエスを見しことなけれど之を愛し、今見ざれども之を信じて、言いが



たく、かつ光栄ある喜悅よろこびをもて喜ぶ。」

とある。このように、「見えるもの」ではなく、「見えないもの」に目を注ぐということは、信ずること(信仰)と深いかわりがあることがわかる。そして、神は人間がそのような「見えないもの」を見つめて(ということとは「信じて」)歩むこと、生きることを望んでおられることがわかる。ヘブル書11章1節に、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実まこととするなり。」

と記され、それに続けて、このような信仰の道を歩んだ人たちのことが列挙されている。コリント前書13章には、

「愛は、……凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。愛は長久いっしゅうまでも絶ゆることなし。……げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存のこらん、而して其のうち最も大なるは愛なり。」

とあるが、ここに挙げられている「信仰」「希望」「愛」も、「見えないもの」に目を注いで生きることであり、その大切さを教えている。神ご自身は「見えない」。しかし、我々のために主イエスを遣わしてくださいました。「見える」イエスにおいて、「見えない」神を見る者は幸いなり。

「我を見し者は父(神)を見しなり」(ヨハネ14・9)

とあるとおり。また、イエスは何のために地上に来てくださったのか、その目的(神の御計画・御意)を理解できた者はいなかった。弟子たちも洞察することができなかった。

イエスの十字架上の死と復活(輝く霊体としての顕現)に関しても同様である。その事態現象において何を見るか。イエスが十字架にかけられ、十字架上で死を遂げられたことはその場に居合わせた人々がすべて肉眼で見た事実・事態であった。しかし、そこに秘められた見えない事柄(真の事態)は神の啓示(キリスト御自身による、あるいは聖霊による)によつて初めて明らかにされる事柄(事態)なのである。

凡そ聖書が伝えようとしている真の内実、天国の事態、「霊」に関わる事柄は、生身なまみの人間が自ずと理解できるようなものではない。パリサイ派の知者ニコデモとイエスの問答のなかで明らかである。

「人新たに生まれずば神の国を見ること能わず。神の国に入ること能わず」

とイエスが語っておられるとおりである。

地上に生きる私たちの姿(肉体を備えた自然のままの私たち)は「見えるもの」であり、五感で知ることのできるもの、肉体だけではなく、心や精神の状態も科学や医学の目で確かめることができるという点で、「見えるもの」である。そして、誰にでも終末(死)が訪れ、人は土に帰る。それだけを見れば、儂い存在であり、「死」はすべての終りであり、人生は「空の空なるかな」の嘆きを伴う。

しかし、神は御子イエスによつて、死んでも死なない命(永遠の生命)を信ずる者にお与え



くださった。この命は「見えない」。しかし、復活されたキリスト(輝く霊体となって顕現してくださったキリスト)は、最早、「見える肉体」の存在ではなく、「見えない、しかし、生きて在り給う永遠の霊的実在者キリスト」なのである。そして、信ずる者に同じ栄光の姿を与える約束して下さっている。ここに私たちの希望がある。

コロサイ書3章3〜4節に、

「(汝らの)生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」

とある。旧き人間(生まれながらの人間の相)とキリストによつて新しい誕生をいただいた「新しき人」との対比を霊的(見えない)次元において明らかにしているロマ書8章の全体が「見えない神」とその深い「愛」の勝利の高らかな宣言なのである。

福音書も使徒書簡も、いや、新約聖書の全体が、「見えるもの、見える現実」に捉われることなく、その奥に隠されてある「見えない、神・キリストの無限の愛(恵み)」を私たちが全存在的に体受して生き生きと生きるようにとの励ましと祝福に満ちているのである。これを宣言しているのが、エペソ書3章16〜19節である。すなわち、

「父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何ばかりなるかを悟り、その測り知るべからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。」

【口語訳】「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くしてくださいるように、また、信仰によつて、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知つて、神に満ちているもののすべてをもつて、あなたがたが満たされるように、と祈る。」

